属人区長の書簡 (2009年4月)

神の愛の明らかな証拠がお要のたとすれば、私子のは、私子のにされた御子のにされたののはこのである。のはこれである。のはこのでは、属人区ではいるとはではいる。とはいるというに説く。

2009/04/08

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

聖週間を間近に控えた今、聖ホセマリアが言われたことを思い出しましょう。「この時期の典礼や信心が思い出させる事柄はすべて、聖パウロが言っているように(1コリント15,14参照)、私たちの信仰の基礎で

ある復活に向かっています。しか し、この復活への道はあわてずに ゆっくりと歩みたいものです。時に は見落としがちな簡単な事実、つま り主のご受難とご死去に一致してい なければご復活に与ることはできな いことを忘れてはなりません(ロー マ8.17参照)。聖週間の終わりのキ リストのご死去に与るためには、ま ずその犠牲の意味をよく理解して、 カルワリオで亡くなられたキリスト と一心同体とならなければならない のです。」[i] 四旬節のこの五週間、 あなたはどのように自分に要求し、 どのように熱心に準備しましたか。 もう少し努力するために、もしそう する必要があるならば、まだ何日か 残っています。

聖パウロの教えは明快です。その教えを黙想し、実行する熱意を新たにするよう勧めます。異邦人の使徒に捧げられた今年、その模範に倣って、私たち信者が皆、心底から望ん

でいるキリストとの一致を達成する には、カルワリオに向かわれる主の お供をする以外に方法はないと確信 できるように、使徒の取り次ぎを願 いましょう。これは、私たちが毎日 お告げのお祈りでper passionem eius et crucem, ad resurrectionis gloriam perducamur キリストの受 難と十字架を通して復活の栄光に達 することができるように、と繰り返 していることでもあるのです。聖週 間が私たちの眼前に示す主の惜しみ ない献身に倣いつつ、ご復活の栄光 にも与ることができるようにしま しょう。

ベネディクト十六世は、パウロ年の ある講話で次のような説明をなさい ました。サウロは「初めはキリスト 教徒の迫害者であり、キリスト教徒 に暴力を振るいましたが、ダマスコ への道で回心した時から、十字架に つけられたキリストの味方になりま した。そして、十字架につけられた

キリストを自分の生きる理由とし、 宣教のテーマとしました。パウロは 生涯を魂のために使い果たしました (2コリント12,15参照)。パウロの 生涯は決して穏やかなものでも、策 謀や困難を伴わないものでもありま せんでした。イエスとの出会いに よって、パウロは十字架の中心的な 意味を悟りました。パウロは、イエ スが『すべての人のために』、また パウロ自身のためにも『死んで、復 活した』ことを知りました。二つの ことが共に重要です。イエスは本当 にすべての人のために死んだという 普遍的な性格と、イエスが私のため にも死んだという主観的な性格で す。それゆえ、十字架において神の 惜しみない憐れみ深い愛が現されま した。」「ii】

聖週間が間近に迫った今、この言葉を熟考しましょう。キリストのいけにえの決定的な理由が明示されています。創立者は述べられました。

「イエスがカルワリオへ向かわれた のは神の愛に動かされたからであ る。十字架上でも、イエスの仕草や 言葉はすべて穏やかで強い愛から出 ている。」[iii] 三位一体の第二のペ ルソナが、神でありながら人になら れたのは、人間が犯した罪、そして 世の終わりまで続くすべての罪の重 荷を自由に引き受け、私たちのため に、無限の価値を持つ償いを創造主 に捧げるためであったことを、掘り 下げて考えましょう。「神は、その 独り子をお与えになったほどに、世 を愛された。独り子を信じる者が一 人も滅びないで、永遠の命を得るた めである。神が御子を世に遣わされ たのは、世を裁くためではなく、御 子によって世が救われるためであ る」[iv]からです。

主が、私たちにお示しになり、今も示し続けておられる無限の愛に対して、どれほど感謝しなければならないことでしょう。また、贖いのご計

画にfiat〈なれかし〉の答えで協力さ れた主の御母であるおとめマリアに どのような感謝を捧げたらよいので しょう。〈愛には愛で応えるべきで ある〉ことを忘れてはなりません。 私たちの愛情がどれほど深くても、 神の無限の愛とは比べものにならな いのです。これは歴然としたことで すが、同時に、もし私たちが〈すべ て〉を捧げるのであれば、主はこの 〈わずか〉なことを喜んでくださる のです。不足は主が補ってください ます。「私たちに与えられた聖霊に よって、神の愛が私たちの心に注が れているからです。| [v]

この聖週間には、自分の存在と生活を全面的に惜しみない心で神の御手に委ねる決意を、今一度新たにしましょう。そうすれば、復活徹夜祭で洗礼の約束を更新する意味がもっと深く理解できるでしょう。私たちのほとんどは、両親が私たちの名によって洗礼による洗いの水を求めま

教皇様が勧めておられます。「聖パウロは自分の人生をあきらめ、和すのために、十字架のために奉仕したのでを捧げました。 十字架は私たちすべてのるとけれたちです。私たちにならなけれるとができるようにならなけれるとができるようにならなければるといません。私たちは皆、このよに人生を築かなければなり ません。自分のために生きるのではなく、神への信仰のうちに生きること。この神について、私たちは皆言うことができます。『神は私を愛し、私のためにご自身を捧げてくださった』。」[vi]

こう自問することができるでしょう。自分を不快にさせるものや困難を予感させるものに対してどのように反応していますか。一つひとつの問題を、意向を正し、超自然のレベ

ルで考えるよう戦っていますか。ためらいは人間にありがちなことですが、その後、直ぐにきっぱりと「主よ、〈これ〉をお望みですか。それなら、私も、喜んで〈これ〉を望みます」 [vii] と答えるようにしましょう。

しかしながら、十字架の後には、ご 復活と栄光のご昇天が控えているこ とを決して忘れてはなりません。主 は、私たちをご自身の勝利に与るよ うにとお招きになりますが、それは いつも自己放棄を通してもたらされ ます。カルワリオにおける主のご死 去は最終のゴールではありません。 最終のゴールは、御父の栄光のため に主の人性が栄光にあげられたこに 示されます[viii]。聖パウロはこのこ とをコリントの信者に次のように教 えています。「キリストが復活しな かったのなら、私たちの宣教は無駄 であるし、あなた方の信仰も無駄で す。(…) あなた方は今もなお罪の

中にあることになります。 | [ix] こ の大いなる確信を持って、私たちキ リスト者はいつも、聖アウグスチヌ スの言ったことを自覚していなけれ ばなりません。「キリストのご死去 を信じるのは偉大なことではありま せん。異教徒も、ユダヤ人も、あら ゆる極悪人でさえもそう信じていま す。すべての人はキリストがお亡く なりになったことを信じているので す。キリスト者の信仰は、キリスト の復活を信じることにあります。私 たちの信仰の偉大さは、キリストが 復活されたことを固く信じることに あるのです。」[x]

ベネディクト十六世はこうご説明になります。「主の死は、主がどれほど大きな愛をもって、すなわち私たちのためにご自身を捧げるに至るまで、私たちを愛して下さったかを示しました。けれども主の復活だけが『確証』となります。主が言われたことは、私たちにとっても、すべて

の時代にとっても真実であることをを確信させてくれます。 (…) 私実での私理での、私理でのではないではないでであることをものといることが重要であることをできることをできませんが、できまれば、できないが、できまれば、信者の証も弱まりが、。 | [xi]

人間の苦しみや死さえも、神の御ける信仰から離れさえになり起うになります。 創立者のあるますのがあると思いるのはないをもられて自然のでは、のではない。のはもない。のはもない。のでは、いつも主とは、いつも主とは、いつも主とは、いつもまでである。

ることの証であり、狂信などではあ りません。これは、復活したキリス トを信じることです。主のご復活が なかったならinanis est et fides vestra (1コリント15,14) あなた方 の信仰は無駄です。| [xii] なぜなら 「十字架の神学は単なる理論ではあ りません。それはキリスト者の生活 の現実です。(…) キリスト教は安 楽な生活ではありません。それはむ しろ、苦労しながらのぼっていくこ とです。しかし私たちは、キリスト の光に照らされながら、またキリス トから生まれる希望によって照らさ れながらのぼっていくのです。 (…)しかし、このように苦しみを 味わうことによって、初めて私たち は人生の深みと、素晴らしさと、偉 大な希望を知ります。この希望は、 十字架につけられて復活したキリス トによって呼び覚まされます。|

[xiii]

この教えは、私たちの日々に光を与え、主と固く一致して、復活祭を信心深く生きるよう助けて主とよる。 聖週間において主とよいなまっ。はどうに対する聖ホセマリ入れまで 質問に対する聖ホセマリ入れまで で、「登場人物の一人になった。 で受難の書物を読み、黙想しなら が、考えて下さい。それは2000年前

のことではなく、今、起こっている ことなのです。あなたは、安心して そうすることができます。聖パウロ がこう教えているからです。lesus Christus heri et hodie, ipse et in saecula (ヘブライ13,8) イエス・キ リストは、昨日も今日も、また永遠 に変わることのない方です。あなた は、弟子たちの中に、主の友人たち の間に、また敵の間にも入り込むこ とができます。さてどんなことにな るでしょうか。主に対して行われた 什打ちにどう反応しただろうかとい う点に着目し、頭と心で反応しなさ い。こうして、あなたは聖週間をよ く過ごすことができるはずです。| [xv] 私はあえて言い加えます。主を 独りぼっちにしないようにしなさ い。そして、そうできるために、マ リアの元に馳せ寄りなさい。

3月下旬にビルバオを訪れました。 当地の司教から、カトリック信者と 社会生活に関する会議で講演するよ う頼まれたからです。この機会を利用して、パンプローナでは、ステラー ゴサでは、ストでは、ないですがあるピラースをもれるがでいる。 サーガ でいる でいる でいる でいませる でいませる でいませる でいませる でいませる でいません と 要の でいる と ない と ない と ない ない ない ました。 ない はいました。

祈りのうちに固く一致して、主を呼び続けましょう。復活祭後の日々には多くの機会があります。16日は教皇様の誕生日、19日は教皇選出4周年記念日です。教皇様とそのとの後の4月20日は、私が属りす。その後の4月20日は、私が属りをに選出されて15周年に当たる人をです。私のために祈って下さい。私立との堅信と初聖体の記念日。月末の29

日は、シエナの聖カタリナの祝日です。教会を心の底から愛し、教皇職の守り手であり、オプス・デイにおける広報の使徒職の仲介者です。これらの記念日に、地上から天に立ち上る祈りに思いを馳せて喜びに満たされています。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2009年4月1日

[i] 聖ホセマリア、『知識の香』95

[ii] ベネディクト十六世、2008年10 月29日一般謁見の講話

[iii] 聖ホセマリア、『十字架の道 行』第十一留

[iv] ヨハネ3,16-17.

[v] $\square - \neg 5,5$.

[vi] ベネディクト十六世、2008年10 月29日一般謁見の講話

[vii] 聖ホセマリア、『道』762

[viii] フィリッピ2,5-11参照

[ix] 1コリント15,14-17.

[x] 聖アウグスチヌス、『詩編講解』120,6 (CCL40,1791)

[xi] ベネディクト十六世、2008年3 月26日一般謁見の講話

<u>[xii]</u> 聖ホセマリア、1964年3月30日 説教のメモ

[xiii] ベネディクト十六世、2008年 11月5日一般謁見の講話

[xiv] 聖ホセマリア、『拓』887

[xv] 聖ホセマリア、1973年4月16日 団欒中のメモ

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2009nian-4yue/ (2025/12/10)